寺社史料と近世社会

幡鎌一弘＝著

本書では、一つには「世俗化」という古典的セオリーからいくつかの概念を取り出し、分析の視点として設定するが、「世俗化」という歴史を論じることは、きわめて合理的な知性の次元にある。

法藏館

寺社史料と近世社会

幡鎌一弘 著

法藏館

法藏館

幡鎌一弘（はたかま・かずひろ）

1961年生まれ。東京大学文学部卒業、神戸大学大学院文学研究科修士課程修了。天理大学おやさと研究所研究員（教授）。編著『近世民衆宗教と旅』（2010年）、『語られた教祖』（2012年、ともに法藏館）、共著『奈良県の歴史』（山川出版社、第2版、2010年）、『奈良の鹿――「鹿の国」初めての本――』（京阪奈情報教育出版、2010年）など。

寺社史料と近世社会

二〇一四年一二月二〇日　初版第一刷発行

著　者　幡鎌一弘

発行者　西村明高

発行所　株式会社　法藏館

京都市下京区正面通烏丸東入
郵便番号　六〇〇-八一五三
電話　〇七五-三四三-〇〇三〇（編集）
〇七五-三四三-五六五六（営業）

装幀者　佐藤篤司

印刷・製本　亜細亜印刷株式会社

©K. Hatakama 2014 *printed in Japan*

ISBN 978-4-8318-6227-3 C3021

乱丁・落丁本の場合はお取替え致します

寺社史料と近世社会◎目次

序　章……3
一　戦国期から近世にかけての宗教史研究　3
二　世俗化論の可能性　8
三　史料論の射程　13
四　本書の構成と概要　17

第一部　中近世移行期における寺社の世俗化……31

第一章　近世寺院の脱呪術化と官僚主義について
——「興福寺学侶引付」の分析を通して——……33
はじめに　33
一　近世前期の「学侶引付」の分析　36
二　行政機関としての唐院会合（寺務寄合）　45
三　戦国期の学侶集会　49
四　官僚主義的寺院運営の展開　58
1　順慶の大和統一と宗教的イデオロギーの克服　58
2　近世初期の動向　62

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おわりに　66
第二章　寺元からみる近世寺僧の「家」と身分……76
はじめに　76
一　戦国期の身分認定と家産化の動向　79
1　国人出身寺僧の身分認定　79
2　諸院諸坊の家産化　82
二　寺僧の「家」と身分の近世化　88
1　「歴代取調書」の分析　88
2　近世前期の動向　94
3　世俗の「家」と寺院　96
おわりに　100
第三章　中近世移行期における寺院と墓……108
はじめに　108
一　奈良における観音堂・西方寺　111
1　竹内賢専の葬儀　111
2　観音堂と葬送　114
3　西方寺と墓所　115

4 〔檀那寺〕と〔聖寺〕 119
5 小　括 124
二 中山墓と長岳寺・柳本墓 125
1 中山墓と周辺地域 125
2 〔三昧聖〕の定住 127
3 中山墓の六字名号碑 130
4 墓・長岳寺・律宗 132
5 寺院（律宗）勢力の後退 135
6 小　括 138
おわりに 139
第四章　中近世移行期の春日若宮祭礼と供物負担
――「春日若宮祭礼記」上に残された送状の分析を通して――…149
はじめに 149
一 史料価値について 151
二 送状の並び替え 158
三 内容の検討 165
おわりに 170

第五章　春日若宮祭礼流鏑馬奉仕からみる祭礼と権力……176
はじめに　176
一　豊臣政権と春日若宮祭礼　180
1　若宮祭礼に関する研究　180
2　若宮祭礼の変化　181
3　流鏑馬定の儀式　182
4　祭礼復興の意味　183
二　近世願主人の性格　186
1　願主人の家　186
2　各家の系譜と特徴　190
3　惣奉行　192
4　家と株　192
三　村の中の願主人　194
1　近世初期の坂堂氏　194
2　十七世紀後半以後の動向　196
3　名乗りの変化　197
4　周縁化と家の自覚　198
四　儀礼の担い手の専業化と儀礼の普遍化　199

1　祭礼奉仕の意義――「党」から「家」へ――　199
2　大宿所の変化　201
3　穢れの排除　202
4　祭礼の普遍化と近世国家　203
おわりに　205

補論　春日若宮祭礼の祭礼日と頭役制の変遷……211
はじめに　211
一　祭礼日の変化　212
二　負担方法の変化　219
おわりに　225

第二部　寺社史料の整理と享受……229
第一章　十六世紀における「興福寺衆中引付」の整理と検討……231
はじめに　231
一　「興福寺衆中引付」の所在と特徴　236
1　所蔵者・所蔵本とその系譜　236

2　記録の形態　240
二　集会の開催状況と組織　242
1　集会の形態　242
2　衆徒の職分　247
おわりに　254
第二章　「多聞院日記」の特質とその享受の歴史……263
一　史料としての「多聞院日記」　263
1　「多聞院日記」の構成　263
2　彰考館の調査　266
3　享保期の調査　267
4　隆遍の筆写事業　268
5　明治初年以後の動向　269
6　『多聞院日記』の刊行　270
二　多聞院英俊の属性　272
1　多聞院英俊のそのほかの書物　272
2　英俊の家族・師匠　275
三　「妙喜院宗英日記」・「尋憲記」と『多聞院日記』　278
1　「妙喜院宗英日記」と『多聞院日記』　278

2　「尋憲記」と『多聞院日記』　280
3　『多聞院日記』にみえない英俊の活動　285
4　情報の集積としての日記　286
おわりに　289
第三章　「二条家旧記目録」からみる二条家史料……299
はじめに　299
一　「二条家旧記目録」と二条憲乗　300
1　「二条家旧記目録」の概要とその写本　300
2　作成者の二条憲乗　304
3　「二条家代々記録覚帳」（「源乗目録」）との対比　306
4　二条家文書のその後　307
二　「二条家旧記目録」の分析から　308
1　二条家の系譜　309
2　文書の構成　313
3　光明院旧蔵史料　315
おわりに　318
第四章　藤村惇叙著「春日大宮若宮御祭礼図」の書誌とその周辺……324

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに　324
一　作者・藤村惇叙（平七）　325
二　「春日大宮若宮御祭礼図」の書誌　329
1　「春日大宮若宮御祭礼図」の構成要素　329
2　享保十五年序本　331
3　寛保二年序本　336
4　安永九年刊本　339
5　その他本　342
三　藤村惇叙の活動　343
1　「祭礼本」以外の出版物　343
2　「祭礼本」成立のコンテクスト　345
おわりに　348

第五章　近世春日社における歴史のナラティブ
——春日若宮祭礼創始説の再検討——……356
はじめに　356
一　保延三年創始説の検討　358
1　「春日大宮若宮御祭礼図」の位置　358

2　「春日社年中行事」　364
3　「古今最要抄」　366
4　尋尊の誤記　367
5　小　括　370
二　忠通創始説の検討　371
1　「春日社年中行事」の作為　371
2　忠通創始説の誕生　372
3　興福寺への逆輸入　375
4　小　括　376
おわりに　377

終　章　権門寺社の歴史と奈良町の歴史との間……383

はじめに　383
1　『京都坊目誌』・『平城坊目考』・「奈良坊目拙解」　383
2　古都論と由緒論・地誌編纂史研究　385
一　藩の史料収集と奈良　388
1　尾張藩・水戸藩の集書事業と京都・奈良　388
2　彰考館の活動　390

二　奈良における地誌編纂の嚆矢　394
1　十七世紀後半の奈良　394
2　玉井定時の「庁中漫録」　395
3　歴史に集う奈良のサロン　398
三　村井古道「奈良坊目拙解」の誕生　400
1　「奈良坊目拙解」の特徴　400
2　引用文献からみる古道の人脈　404
3　「奈良坊目拙解」の行方　408
おわりに　411
初出一覧　421
あとがき　423
索引　i

寺社史料と近世社会

序章

顕密主義は、権力との関係においての体制ではなくなったといってよいが、依然として宗教思想や信仰の根底に横たわっていた。[1]

（黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』）

世俗化のテーゼが、かつてと同様の信頼を勝ち得ることができないとすれば、その理由は、「政治」と「宗教」という二つの範疇が、私たちが考えていた以上に深く結びついていることが見えてきたためである。（略）世俗の概念は、宗教の概念なしでは成り立たないのである。[2]

（タラル・アサド『世俗の形成――キリスト教、イスラム、近代――』）

一　戦国期から近世にかけての宗教史研究

近世宗教史を全面的に振り返ることは、およそ困難な作業ではあるが、いくつかの宗教史の概説書を導きの糸としてその動向を跡づけてみると、おおよそ以下のような五つの論点に絞り込めるだろう。[3]

①織豊政権・江戸幕府による宗教統制（キリスト教や日蓮宗不受不施派の禁止、門跡制度、本末体制、宗門改制度、寺檀制度）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com